

話題提供者：小野 亮介

演 題：スルタンバク・バフティヤール試論：テュルク系亡命者たちの多地域・多言語ネットワークの一端として

開催日時：2018年11月7日，18:00～19:00

開催場所：100号館第1会議室

1. はじめに

報告者は、20世紀前半における政治的変動によって中央ユーラシアからヨーロッパ、中東、極東へ逃れたテュルク系（英語ではTurkic。言語的、文化的に近いトルコ人Turkishの上位カテゴリーとして区別される）の亡命者に焦点を当てた研究をしている。彼らはユーラシア東西に広がるネットワークを形成し、祖国解放運動に従事した。本報告では、報告者が「多地域・多言語」をその特徴と位置付けている亡命者内外のネットワークの一端として、スルタンバク・バフティヤールというほぼ無名の亡命者に注目し、彼の遍歴とその周囲の考察を目的とした。

2. 20世紀前半の東西トルキスタン

まず、バフティヤール亡命以前における東西トルキスタンの状況について確認しておきたい。19世紀後半以降ロシア帝国の植民地となっていた西トルキスタン（ソ連領中央アジア）では、1917年のロシア革命とそれに続く内戦によって、ムスリムによる民族的自治運動が活発化した。実際にいくつかの自治政権が樹立されるが、いずれもボリシェビキに打倒されるか取り込まれた。その結果、反ソ的ゲリラ運動である「バスマチ運動」が各地で勃発するが、1924年頃までには沈静化し、国外へ逃れた亡命者たちが結成した「トルキスタン民族同盟（以下、原語の略称であるTMBと表記）」が反ソ運動を主導した。TMBはイスタンブルやパリなどに拠点を置き、機関誌『若きトルキスタン』（1929-1939）を発行していた。

他方、18世紀後半に清朝の領有となり、新疆と名付けられた東トルキスタン（中国領中央アジア）は、民国期になると、漢人政治家・軍人の独裁的統治によって中央政府から事実上独立していた。1931年にホージャ・ニヤズがハミで反旗を翻したのを皮切りに、翌1932年にはホータンにてムハンマド・エミン・ボグラが、更に1933年にはカシュガルでサービト・ダーモッラーらが蜂起し、1933年11月にはカシュガルで（第1次）東トルキスタン・イスラム共和国（以下、共和国と略記）の樹立が宣言された。ホージャ・ニヤズを名目的大統領、ダーモッラーを首班としたこの政権にどこまで共和国としての実態があったかは不鮮明なのだが、1934年4月には甘粛のダウンガン（漢語を用いるム

スリム）の攻撃によって崩壊した。ボグラら共和国関係者の一部はアフガニスタンやカシミールに逃れ、支援を求めつつ再起を図った。本報告の主人公たるバフティヤールもその一人である。

3. カシュガル時代

バフティヤールの前半生はほとんど詳らかではないが、現ウズベキスタン領の地方都市マルギランの出身であったとされる。相応の教育を受けたようだが、バスマチ運動に身を投じ、「コルバシュ」（首領）の一人となった。運動の失敗により1928年には東トルキスタンへ越境する。その後、バフティヤールは前述のサービト・ダーモッラーの側近となり、共和国の母体となった秘密結社にも参加している。共和国が樹立されると、バフティヤールは陸軍次官兼軍需部長に任じられた。バスマチ運動での経験を買われてのことと思われるが、興味深いのは、統一的な軍組織を欠き、在地のクルグズ系軍人と外来の（そして恐らくバフティヤールと同民族の）ウズベク系軍人が分立する状況にあって、バフティヤールが前者の側につき、ウズベク系の中央司令官と衝突した点である。政権崩壊の直前には前述の『若きトルキスタン』誌に寄稿し、ソ連の庇護下に入る協定を独断で結んだホージャ・ニヤズを痛烈に批判している。この寄稿から、バフティヤールの行動原理が、南京政府、漢人への反感より反ソ主義に基づいていたことが窺われる。

4. メッカ滞在

バフティヤールは共和国瓦解後、メッカに逃れた（1935年夏まで滞在?）。これ以降彼は、パリに拠点を置いたTMB指導者ムスタファ・チョカイオールに書簡を送り、東トルキスタンの状況と自らの活動について報告するようになる。これらの書簡は、パリにあるムスタファ・チョカイ・アーカイブに収められており、報告者はバフティヤール書簡8点の存在を確認できた。メッカ滞在期における書簡2通でバフティヤールは、サービト・ダーモッラーら共和国幹部の処刑をチョカイオールに報告し、自らが執筆し、同封した伝記を『若きトルキスタン』に掲載するよう依頼している。また、ロシアから東トルキスタンに逃れた亡命者をバフティヤールがインドに滞在させたものの、英領インド

「人間科学研究交流会」報告

政府が容認せず圧力をかけたため、件の亡命者をメッカに呼び寄せたという。このように、バフティヤールは東トルキスタンの情勢をチョコカイオールに伝える一方、国外での反ソ運動も自身の裁量で展開していたらしい。

5. イスタンブル滞在

メッカを離れたバフティヤールは、イスタンブルに1936年10月頃まで滞在した。この時期にチョコカイオールに送った書簡は3通である。その内容は多岐に渡るが、最も興味深いのは、やはり共和国に参画したテヴフィク・パシヤや、著名な在日タタール人であるアブデュルレシト・イブラヒムへの批判的な言辭が見られる点である。

前者はシリア出身の汎イスラム主義者で、1933年のカシュガル蜂起に身を投じ、ホージャ・ニヤズとも関係があった。共和国崩壊後、駐アフガニスタン公使北田正元の仲介を経て1936年に来日するが、彼が希望した日本との提携は外務省に容れられず、失望を味わったという人物である。

また1909年に訪日し、その旅行記によってテュルク系ムスリムの日本人観にも大きな影響を与えたイブラヒムは、1933年にイスタンブル駐在武官神田正種らの手引きによって再来日を果たした。1938年に東京モスクが開堂すると在日ムスリムのシンボルに据えられるが、その背景には、1937年の日中戦争勃発によって、中国や満洲、内モンゴルのムスリムに対するアプローチ、いわゆる「回教政策」の見直しに外務省や軍部が迫られたという事情があった。これらを踏まえると、両者に対するバフティヤールの批判の核心は、日本に赴いても彼らの望むような支援は見込めず、あるいは一方的に利用されるだけだという危惧にあったように思われる。

6. カーブル滞在

バフティヤールはイスタンブルで知り合ったTMB指導者の一人、オスマン・コジャオールと共に1937年初頭にアフガニスタンへ渡った。カーブルでは高級品として知られるカラクリ羊皮革の取引に従事したというが、後述する反ソ活動を指す隠語である可能性も否定できない。チョコカイオール宛書簡3通では、TMBカーブル支部を仕切るマフムート・アイカルルとの接触やこのアフガニスタン訪問を巡るチョコカイオールとコジャオールの軋轢に対するバフティヤールの心痛が述べられている。

バフティヤールは祖国解放に備えるべく、アフガニスタンで亡命者同胞の組織化に従事した。書簡によると、彼は前述のイスタンブル滞在時に、コジャオールの是認のもと、「ウザクバイ（「遠くの富者」の意）」なる者と接触し、彼らの支援を背景とした祖国解放を企図した。トルコの研究者アハト・アンディジャンが部分的に明らかにしたように、「ウザクバイ」とは中東における日本の武官、外交官らを指

すTMB側のコードネームに他ならない。バフティヤールは、テヴフィク・パシヤやイブラヒムとは別ルートの、より直接的な支援を日本から引き出そうとしたのである。

アフガニスタンは、日本の対ソ戦略においても重要な拠点であった。田嶋信雄によれば、1936年に結ばれた日独防共協定は空虚な協定ではなく、関連する航空協定では西進する満洲航空と東進するルフトハンザ航空の結節点としてアフガニスタンと新疆の国境が想定されていた。1936年11月に武官としてカーブルに赴任した宮崎義一少佐は種々の謀略工作に着手するが、彼の活動は英ソに委細が漏れており、アフガン政府の抗議によって、1937年10月に彼は離任を余儀なくされた。田嶋は見落としているようだが、バフティヤールは宮崎の工作対象の一人であったのである。

こうした「対反ソ」防諜を担った人物こそ、チョコカイオールの信用すら得ていたアイカルルであった。彼の正体はOGPUのエージェントであり、多くのTMBメンバーを罠にかけて、ソ連による逮捕、処刑を実現させた。実際、日本側の外交文書には「スルタンベック事件」に言及したものがあり、1937年4月にチョコカイオール関係者10数名がトルキスタンで射殺されたという。バフティヤールが宮崎の支援の下アフガニスタンで展開した地下活動は、同志であるはずのアイカルルを通じソ連側に露見していた可能性が高い。

7. おわりに

宮崎少佐はカーブル放逐に際しバフティヤールを日本に送ろうとしたが、彼は宮崎の意に反してイスタンブルに戻った。1938年11月には反ソ活動の嫌でトルコ追放処分となっている。イスタンブル駐在武官磯村武亮から見限られ、カイロの横山正幸公使からも相手にされなかったバフティヤールは、サウジアラビアのターイフに落ち延び、1960年頃に亡くなった。

バスマチ運動やTMBおよび東トルキスタン共和国という東西トルキスタン双方の運動に身を投じ、メッカ、イスタンブル、カーブルを転々としつつ、反ソ的民族運動を追求し続けたバフティヤールの数奇な人生は、スケールの広さからしてそれ自体興味深い。しかしより重要なのは、イスタンブルやカーブルでの「ウザクバイ」との接触に注目することによって、バフティヤールらトルキスタン人亡命者とそのネットワークを当該期日本の対ソ外交の中に、破綻が宿命付けられていたとはいえ、位置づける可能性が生じた点である。中央アジア／トルコ史と日本史の交差という意味において、日本人研究者のアドバンテージは大きく、またそれ故に学問的責務も課されていると言えよう。

※本報告は、[JSPS科研費 JP17H07174](#)の助成を受けたものです。